

きずな

KIZUNA

人権クエスチョンvol.17

あなたの「普通」は 誰の常識？

- | | |
|--|---|
| 01 出合いを重ね、想いをつなぐ 2・3 | ハンセン病問題から学ぶ、人権の尊さ 8 |
| 米津 勝之さん(阪神・淡路大震災被害者遺族) | 畑野 研太郎さん(国立療養所邑久光明園 名誉園長) |
| 02 阪神・淡路大震災から31年 4 | 見上げれば 9 |
| 米山 正幸さん(北淡震災記念公園 総支配人) | 日野 友輔さん(俳優) |
| 03 人権を尊重する防災
ー多様な声が地域の力になるー 5 | 【連載】国際社会と人権(17)
「エイジズムと高齢者」 10 |
| 桜井 愛子さん(神戸大学大学院国際協力研究科 教授) | 望月 康恵さん(関西学院大学法学部 教授) |
| 04 多文化共生へ向けての取組 6 | ふれあいサロン 11 |
| 久保 美和さん(NPO法人多文化センターまんまるあかし 理事長) | 情報ぶらざ 12 |
| 05 ご近所付き合いと人権 7 | |
| 吉富 志津代さん(武庫川女子大学心理・社会福祉学部 教授) | |





出会いを重ね、想いをつなぐ

阪神・淡路大震災
被害者遺族

よねづ かつし
米津 勝之さん

1960年芦屋市生まれ。兵庫県立芦屋高等学校・関西大学文学部卒業。NPO法人「1.17希望の灯り」準会員。1995年阪神淡路大震災にて被災し、自宅は全壊、長男と長女を失う。1997年二人の思い出を綴った「わすれないあなたのことを一漢之と深理のいる風景」（ラ・テール出版局）を自費出版。自身の体験と人々とのつながりを軸に過去と現在と未来のつなぎ手として、芦屋の小学校での学びを起点に、次世代に語りつなぐ活動を兵庫県をはじめ、各地の学校園を中心に行っている。

『命』との出会い

1995年1月17日午前5時46分に発生した阪神・淡路大震災。この日を境に私の人生は大きく変わってしまいました。

大きな揺れによって住まいは全壊、7歳の長男と5歳の長女の命は奪われてしまい、私と妻も負傷しました。昨日までの当たり前が一瞬にして崩壊しました。何よりも子どもたちが先に逝ってしまったことは「なんでやねん」とずっと叫んでいた思いでした。未来に向けてなど考えることもできず、周りからの問いかけにもほとんど沈黙する日々でした。

一年が経ち、長男が通っていた小学校が作成した追悼文集「祈」を受け取りました。文集の中ほどに掲載されていた『命』という文章。親友を震災で失い私の長男のペアでもあった当時6年生の女子が筆者で、文末は次のように締めくくられています。

「生きていること。それは困難の壁にぶつかりそれを乗り越えること。約束された死までの時間を輝くものにする
こと。死んでしまうこと。それは輝く人生を終え、他の人の
心の中で永遠に生きてゆくこと。」この文章との出会いが私を変えました。これを6年生が書いたことに驚き、悔やみ続けてなかなか動けなかった私に力を与えてくれました。逝ってしまった二人の子どもからの呼びかけのようにも感じました。逝ってしまった子どものために、二人と共にできることを探しに行こう、それこそが生き残った私が命を受け継ぐ者としてできることではないかと考えたからです。



〈震災直後の様子〉

「出会い」の積み重ね

命を受け継ぐ旅は数年後、長男が通っていた小学校の6年生に体験を語ることから始まりました。私の語りが終わりと、子どもたちが質問や感想を述べます。最後に呟いた女子の感想「出会いの積み重ねが人生だった」は衝撃でした。

何と素晴らしい聴く力でしょうか。彼女が私の話を聴いて自分にとっての意味を考え、表現することを目の当たりにして、一方的な語りではなく子どもたちと向き合い、語り合い、共に考える場づくりから何かが生まれるのではないかと私は思いました。

以来、子どもたちと震災をテーマにしながら学び合うことで、震災で起こったことを知るだけでなく防災だけに縛られるのではなく、短い人生しか生きることができなかった私の子どもたちをはじめ、あの時まで生きていた人の命を感じ、その周りにいた様々な人々の存在を想像し（それは今でも続いていること）、自分にとっての意味を問い、未来に生きることを描いていく力を育てていく学びを作り上げていきたいと考え行動するようになりました。

その折、私が伝えたい想いは、児童文学研究者・清水眞砂子氏の言葉を借りれば、「人生というものは生きるに値するものだ」ということです。



〈家族4人での写真〉

「対話」から生まれること

震災・災禍を体験した人＝体験者の痛み、直接経験していなくともそれを知ることと向き合う非体験者の辛さ。それぞれを語り合い聞き合うことによって醸成されていくことがきっとあるのだと信じたいです。答えは決して1つではなく、様々な考えや問いが存在することは、子どもたちには難しいかとも思いましたがとんでもありません。子どもたちの力は私の想像を超えていきます。共に学んだ子どもたちは多くのものを私に受け取らせてくれました。

ある年の小学校の追悼式で震災を語り継ぐ上で大切なことは次の3つだと語ってくれた6年生。「言葉の力」「聞くことの大切さ」「発言する勇気」この3つの言葉は震災学習に留まらない大きな意味を持つものだと考えます。その他にも私は小学校での学びの中で多くのことを受け取ってきました。「そうぞうりよく」とは「想像」だけでなく「創造」も含まれる、「亡くなった人の想いを乗せて語りつぎたい」など。それらを一時に留めず次の学びにつなげていき、また新たな学びが生まれていくことが大切です。

長男が通っていた小学校では20年以上「語り継ぐ会」を子どもたち自身で行っています。6年生が私や他の人々の話を聴き自ら調べたことを手製の資料を基に5年生に語り継ぐ場です。5年生から発表に対する質問や意見が寄せられ、語り継ぐというより語り合う場になってきています。そこにいるのは震災を体験していない子ども同士。それでも「命」を守る、「生きる」ことを大切にすることはどういうことなのかという学びが醸成され、大人たちもまた学ぶ場になっています。私は「語り継ぐ会」を訪れる度に逝ってしまった長男と長女の存在をはっきりと感じています。

学びは芦屋の小学校に留まるものではありません。東日本大震災の被災地・岩手の高校生との出会いから始まり、岩手の学生、宮城の遺族の方々など体験した災禍は異なれども出会いから学びつながることが続いています。音楽を通じてつながった岩手の高校生は2025年はるばる兵庫を訪れて両被災地をつなぐ歌を合唱、そこに地元兵庫の高校生が参加することも実現できました。直接体験はしてなくても、離れていても、昨日まで知らない人であってもつながることができるのです。



〈精道小学校での授業の様子〉

「対話」の旅は続く

阪神・淡路大震災から30年余が経ち、当事者（体験者）が高齢化もしくは亡くなって伝承が困難になってきている限界説も言われるようになりました。戦争体験の伝承が困難と言われるように。

しかし、私はそうは思いません。出会いが積み重なり体験・非体験の壁を越えて互いにつながっていく時に見えてくるものがあると信じています。かつて私に岩手の高校生が「米津さんが芦屋の小学校で希望の授業をされている時、私たちは岩手から希望の歌声を届けています。」という手紙をくれたことを思い出します。高校生は私の授業を希望と受け止めたのです。

「過去」を知り、「今」と向き合い、「未来」の自分を描く学びを子どもたちと出会い、つながり作り上げていく覚悟を新たにする日々です。そのことこそが震災で逝ってしまった二人の「命」を受け継ぐことだと信じているからです。

これからも「出会い」を重ね「つながり」を広げていくことで「命を受け継ぐ」私の旅は逝ってしまった二人の子どもと共に続いていきます。



〈漢之くんと深理さんの写真〉

〈米津 勝之さん活動の足跡〉

1997年

二人の思い出を綴った「わすれないあなたのことを－漢之と深理のいる風景」(ラ・テール出版局)を自費出版。

2009年

2002年生まれの子男・凜が亡き兄のランドセルを背負い通学する様子が記事となり、新聞協会「ハッピーニュース大賞」に選ばれたことから「世の中の扉/ にいちゃんのランドセル」(著:城島充/2009年講談社)として書籍化。

2015年

NHKにてドキュメンタリードラマ化。

2017年

音楽家・松本俊明作詞・作曲による歌が作られ、CD化。岩手県立不来方高等学校音楽部(現在は統合のため、南昌みらい高等学校)が合唱曲として歌いつなぎ、2025年2月兵庫県立神戸高等学校合唱部と合同演奏も行われた。



話してくれたのはこの方！



北淡震災記念公園
総支配人

こめやま まさゆき

米山 正幸さん

阪神・淡路大震災から31年

平成12年2月から、北淡震災記念公園勤務。現在、北淡震災記念公園総支配人。語りべとして自らの体験、当時の北淡町の様子や地域コミュニティの大切さ、命の大切さ、地震に備えることの大切さなどを語る。公園内の語りべだけでなく、積極的に出張講演に出かけ、全国で地震に備えることの大切さを伝えている。

兵庫県南部地震

1995年1月17日午前5時46分、震度7の激震が我が北淡町（現淡路市）を襲いました。その被害の甚大さから「阪神・淡路大震災」と呼ばれる未曾有の大災害を被り、町は壊滅的な状況になりました。尊い39名の命が奪われ、すべての住民が被災し、産業は大打撃を受け、風光明媚で平穏な住みよい町であったふるさとが変わり果てた姿になってしまいました。

北淡町で最も被害の大きかった富島で被災した私は、2か月の娘と女房の上に覆いかぶさることしかできませんでした。幸いケガすることなく無事だったので、娘と女房を避難所に連れて行き、救出活動に走りしました。当日の午前中は、瓦礫をのけて人が見つかったら泣いたし、生きていれうれしくて泣いたし、亡くなっていれば悲しくて泣いたしの繰り返しでした。

救出活動の後、誰がどの避難所に避難しているのか確認して回ったり、地域の見回りをしたり、避難所の運営等々、大変であったことを今でも覚えています。



※地元の消防団や近所の方で協力して、倒壊家屋の瓦礫の中から約300人が救出された。



※断層は、水平方向に最大210cm、上下方向に最大140cmのずれが生じた。

ご近所付き合い

当時の北淡町ですが、何の根拠もなく地震のないところと思っていました。備えゼロ・知識ゼロ・意識ゼロの中で地震に遭ってしまって、まち全体がパニック状態になってしまったというのが本当のところですが、そんな北淡町ですが唯一良かったと思うのが、田舎だからこそのご近所付き合い、地域コミュニティです。ご近所さんの家族構成、生活実態等々がわかっていました。そのおかげで、当日の正午過ぎには生き埋めになっていた約300人を全員救出できたのではないかと、夕方5時過ぎには行方不明者ゼロを発表できたのではないかと思います。

普段から挨拶をして顔見知りになっておく、たとえ年に1回でも住民どうしが顔を合わす機会をつくること、一番の災害への備えではないかと考えます。

減災はできる

地震であれ、風水害であれ、発生そのものを未然に防ぐ力は私たち人間にはありません。自然災害は起こってしまいます。それなのに私たち人間には、それを完全に断ち切ってしまう^{ふさ}、塞いでしまう、完璧な防災などありません。それならみんなで、少しでも被害を減らすことを考えましょう。

阪神・淡路大震災から31年。歳月は記憶の風化という現実を一層突き付けています。しかし、忘れてしまっては、また繰り返してしまう。地震を体験した者として、それだけは避けていただきたい。かけがえのない命、かけがえのない犠牲を無駄にだけはしてほしくありません。被災した者の、生き残った者の務めとして、あの日の記憶と教訓を次世代に繋いでいかなければと思っています。

北淡震災記念公園
野島断層保存館

HPは
こちら





話してくれたのはこの方！



人権を尊重する防災 — 多様な声が地域の力になる —

神戸大学大学院
国際協力研究科
教授

さくらい あいこ
桜井 愛子さん

神戸大学大学院国際協力研究科教授。専門は防災教育・国際教育協力。東日本大震災の被災地石巻市での学校防災の拡充に一貫して取り組みながら、子どもや外国人住民等を主体とする防災の実践と研究を進めている。

地域を支える防災教育

阪神・淡路大震災から30年以上が経ち、震災を経験していない世代が増えました。災害時に私たちが決して忘れてはならないのは、「人権を尊重する防災」、すなわち多様なニーズを尊重する姿勢です。防災教育とは、非常持ち出し袋の準備やハザードマップの確認といった個人の備えだけでなく、日頃から隣近所の人と顔を合わせ、コミュニケーションを図ることにこそ、その本質があると言えるでしょう。

災害が奪うのは、命や財産だけではありません。それは、人々が尊厳をもって生きるための「潜在的な機会」をも奪います。災害時、身体や性別、年齢、障がいの有無、言語、文化など、多様な背景からくる困難によって、避難が遅れる、必要な情報にたどり着けない、孤立してしまうといった状況は、その人の「生きる機会」そのものを脅かしかねません。

特に、いわゆる「要配慮者」と呼ばれる人々への視点は不可欠です。しかし、彼らをただ支援の対象と見なすのではなく、一人ひとりが持つ力を引き出し、共に防災の担い手として地域を支えるという視点を持つことが重要です。多様なニーズに応える防災を災害前から進めることは、多文化共生の安心な地域づくりそのものに繋がります。

主体的な参加を促す活動

外国人住民を防災訓練に巻き込み、母語を活かした情報伝達のリーダーになってもらうことは、彼らの力を引き出すだけでなく、地域全体の防災力向上にも貢献します。

防災対策を考える際には、複数の困難が重なり合う「交差性 (Intersectionality)」の視点が不可欠です。例えば、外国人家庭の母親や障害を持つ女性、性的マイノ

リティなど、複合的なマイノリティに属する人々は、災害時に特別な課題に直面します。避難所でのプライバシー確保や特別な事情に配慮した備蓄、多言語での情報提供といった対策は、こうした人々が尊厳を保ち、安心して避難生活を送るために不可欠です。

これらの議論を実現するために、防災教育の役割を捉え直す必要があります。防災教育は、単に命を守るための手段を学ぶだけでなく、多様なニーズを抱えるコミュニティで共に支え合って暮らし、安全安心な地域を創っていくこととして捉え直すことができます。

拡散したら「加害者」にも

災害時には「我慢」が美德とされる風潮もありますが、それは一部の潜在的能力を奪いかねません。防災庁準備に向けた議論でも、避難所の質の改善が重要な課題とされています。大切なのは、災害時でも誰もが自分らしくいられるよう、多様なニーズに応えること。それは特定の誰かを優遇することではなく、一人ひとりの尊厳を尊重し、潜在的能力が奪われないようにすることです。

阪神・淡路大震災の教訓は、人と人とのつながりが命を守る最大の力になるということでした。そのつながりを、外国人住民や子どもたち、そして多様なジェンダーの人々を含む、あらゆる人々と共有し、次の世代へとつないでいくこと。それが、これからの兵庫にとって最も大切な防災の備えだと思います。





話してくれたのはこの方！



多文化共生へ向けての取組

NPO法人多文化センター
まんまるあかし
理事長

くぼ みわ
久保 美和さん

2015年、ボランティアグループを立ち上げ外国にルーツを持つ子どもへの支援を開始。2016年、NPO法人「多文化センターまんまるあかし」を設立。日本語支援活動だけではなく、外国人講師の派遣事業や団体運営に関する全般業務を担当。団体のモットーは「国籍や文化の違いを壁にせず、共に生きる未来をめざす！」

子どもたちの笑顔のために

外国人や外国にルーツを持つ家族は全国で増えています。私たちが活動の拠点を置いている明石市も例外ではなく、支援を求める方の増加と共に、私たちは活動拡大を続けてきました。私たちが活動を始めて10年になります。きっかけは母親の国際再婚で日本にきた外国にルーツを持つ少女との出会いでした。「学校に行くのが怖い。だってみんな私のこと違うって言うから」彼女の言葉です。彼女は日本語が十分に理解できず、学校で孤立していました。そんな彼女に日本語を教え、話し相手になると笑顔が生まれました。彼女の笑顔を見た時「日本の生活で孤立し、不安を抱えている子どもたちの居場所を作りたい」そう想いました。その想いは形となり「まんまるあかし」は、様々な国にルーツを持つ子どもたちの居場所になりました。

心が痛むこと

時代の流れと共に、外国人を取り巻く問題は形を変えています。特に、昨今の外国人問題には心が痛みます。悪いことをする人は、外国人であれ日本人であれ、罰せられて当たり前だと思いますが、今の空気感は「外国人は全員悪い」という風になっているような気がします。先日、小学2年生の外国にルーツを持つ子どもが、友達から「外国人と一緒にいたら早く死ぬねんで」と言われたそうです。その子は不安そうに「私と一緒にいても先生死なへん？大丈夫？」と聞いてきました。「絶対死なないよ～！◎◎ちゃんと一緒にいたら元気になれるよ！」とフォローしましたが、彼女の心の内を想像すると胸が痛いです。

齟齬を取り除く

文化の違いがありますし、言葉が通じないから、齟齬も生まれると思います。そんな齟齬が大きくなればなるほどトラブルが生まれ、外国人排斥の動きにも繋がっているのだと思います。しかし、そういう齟齬を埋めるために私たちのような団体があるのだと思いますし、私たちが10年活動を続けてこられたのも、国籍や文化の違いを壁にせず共に生きていくために、そういう齟齬を埋めたいとたくさんの方が願い、尽力して下さっているからだと思います。私たちが力を入れている活動に、外国人講師の派遣や、国際交流フェスティバルなどを通して、多文化共生推進活動があります。地域に住む方々が、外国人や外国の文化を身近に感じ、様々な違いを受け入れ、お互いを尊重し合える心を育むことが、齟齬を取り除き、共に生きる未来に繋がると信じています。

information

特定非営利活動法人 多文化センター まんまるあかし

外国人・外国にルーツを持つ家族への支援だけではなく、「国籍や文化の違いを壁にせず共に生きる未来」をめざし、多様な文化・習慣を持った人々が相互理解を深める事業や、国籍を問わず全ての人々が活躍できるための事業に取り組む。

○『育てる』外国人・外国にルーツを持つ子どもたちのための日本語・教科学習支援教室の運営

○『支える』外国人女性の会運営、多言語での情報発信

○『世界とつながる』語学講座、外国人講師派遣、国際交流イベントの開催等

○『世界をつなぐ』通訳、翻訳事業

※2024年から外国人のためのチャレンジカフェ「まんまるカフェ」を開業。世界の日替わりランチを提供。





話してくれたのはこの方！



ご近所付き合いと人権

武庫川女子大学
心理・社会福祉学部
教授

よしみ しづよ
吉富 志津代さん

NPO法人多言語センターFACIL特別顧問、兵庫県防災会議委員など。南米の領事館秘書を経て、1995年の阪神・淡路大震災後は、外国人救援ネットやコミュニティ放送局FMわいわいの設立に参加し、多言語環境促進、外国ルーツの子どもの教育、外国人自助組織の自立支援などの活動に従事、これらを主な研究テーマとする。

ご近所トラブルの二大テーマ

先日、私が住んでいる地域の自治会の集まりがありました。私はなかなか都合が合わず参加する機会は少ないのですが、住民の一人の「これから外国人とかが近所に住むようになったら、ゴミの問題とか騒音とか大変ですよ」と何げない発言にちょっとびっくりしました。私は心の中で「出た！ ご近所トラブルの二大テーマと外国人」と思ってしまいました。そうすると、すかさず「それは、もし日本語がわからないならルールをしっかりと伝えたらいいだけでしょ、トラブルは日本人とか外国人とか関係なく、個人によって起こるんです」との発言があり、ちょっとほっとしました。

最近では、多くの場面で「知らない人」が、自分の住んでいる地域に入ってくることに、強い警戒心を持ててしまいます。子どもにも、「知らない人に話しかけられても返事をしてはダメ」とか、見かけない人がいたら「不審者」として「気をつけるように」という注意喚起が出されます。昭和時代のように、子どもに「知らない人でも道で会ったら大きな声で挨拶をしよう」とかのスローガンは聞こえてきません。それは、「特殊詐欺」や「無差別殺人」などといった物騒な事件が起きているからでしょうか。

日本人ファースト？

さて、なぜ「外国人＝トラブルを起こす人」のような思い込みを持っている人がたくさんいるのでしょうか？

日本社会には、とてもたくさんのルールがあって、それを守るということが絶対のような空気感があります。例えば、外国人と犯罪率のことを結びつけて考える人も多いのですが、実際には在日外国人は増えていても外国

人の犯罪は増えていません。むしろ外国人の犯罪率は低下傾向にあります。また日本の健康保険の被保険者数は、外国人の若い層が増加していますが医療費に使われる率はたった1.73%で、むしろ保険料の納付によって日本の医療保険制度を支えてくれています。日本では、今さら声に出さなくとも、すでに「日本人ファースト」になっている現実があります。それが当たり前という意識が根強く残っています。人権に国籍は関係ないのに、その意識こそが偏見の原因ではないでしょうか？

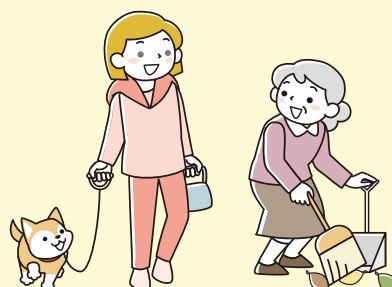
みんなのためのルール

世界を旅していると、その地域ごとにルールがあり、日本で常識だと思い込んでいることが非常識だったりすることもあります。同じ地域社会で暮らす場合は、お互いが地域のことを知り合うための努力と、知った上でさらに良いと思うルールに、一緒に変えていければいいのではないのでしょうか？それが誰にとっても住みやすい「多文化共生社会」への一歩だと思います。

〈参考〉

・是川 タ(国立社会保障・人口問題研究所)「外国人が増加すると治安が悪化するのか？ 犯罪統計による検証」日立財団グローバル ソサエティ レビュー 2025年
<https://www.hitachi-zaidan.org/global-society-review/vol4/commentary/index.html>

・「外国人優遇」は本当か？ データで見る国民健康保険・国民年金の実態」大和総研 2025年
https://www.dir.co.jp/report/column/20250725_012295.html



ハンセン病問題から学ぶ、 人権の尊さ

国立療養所邑久光明園
名誉園長

はたの けんたろう
畑野 研太郎さん

長崎大学医学部卒業。淀川キリスト教病院外科勤務。1985～1994年JOCS(日本キリスト教海外医療協力会)よりパングラデシュ派遣。帰国後、国立療養所邑久光明園に勤務。2009年園長に就任。現在、邑久光明園名誉園長(2014年～)、JOCS会長、博愛社理事長などの他、「ライフ・リバー」という海外協力NGO(任意団体)を立ち上げて活動中。



ハンセン病と人権侵害

もしも、あなたがある病気にかかられたとして、その病気のために強制収容所に連れていかれ、一生そこで過ごすように命じられたら、あなたはいったいどう感じるでしょうか。病気にかかったために終身刑の判決を受けるようなものです。

そこでは、あなたは、自由に教育を受け、自由に職業を選択し、自由に居住地を選び、自由に財産形成をし、自由に結婚し、自由に子どもを育てるなどという、私たちが保証されている生活を奪われ、生まれた家族とともに暮らすこともできずに人生を送らなくてはならないのです。つまり、人権を奪われた人生を送ることになるのです。そうした人生を強制された人々がいます。ハンセン病を患われた人々です。

それでは、ハンセン病とはそれほど恐ろしい病気でしょうか。そうではありません。

もちろん、治療薬のない時代や地方でこの病気にかかられた患者さんにとっては不幸なことに間違いありません。しかしそれは、どんな病気にかかられたとしても、その方にとって不幸なことであるのと同じです。ハンセン病にかかるということの不幸は、病気の困難に加えて、いやそれ以上に、差別や偏見にさらされることにあるのです。

ハンセン病患者への差別の広がり

ハンセン病はなぜこれほど、歴史的にも長く、世界的にも広く、差別の対象となってきたのでしょうか。それは、この病気で侵される皮膚や末梢神経や眼などが、誰の目にも見える体の表面にあらわれることにあるでしょ

う。また、発病力の弱い病気であるため、家族内感染が多かったりマイノリティであったりすることも理由であると思われます。あるいは、これは治療薬ができて病気が治るようになってからも起こってきたことですが、末梢神経障害を後遺症として起こしてしまうと治癒後も障害が進行してしまいます。でももっと大きい理由は、国・公権力が過酷な強制隔離を人々の面前で行い、それを見た人々の差別意識がさらに強化されるという歴史のせいであると思います。

なぜ国は、この過酷な強制隔離を進めたのでしょうか。それは人々が差別や偏見をもったからです。卵が先か鶏が先かといった話になりますが、私たちが差別や偏見を持つことの本当の恐ろしさは、国がそれを理由に人々の生活に介入してくる可能性があることなのです。だから、何らかの差別や偏見を持つということは、まわりまわってあなたの自由と人権を侵してくる可能性があるということなのです。

人権が守られる世界へ

差別や偏見というものは、よく分からないものへの「恐れ」から生まれるものです。それなら、もしよく分からない隣人(病気の人も含めて)がいれば、よく分かる努力をいたしましょう。差別や偏見を持続けるような自分を正当化することは、よく分かろうとする努力を放棄した怠惰な態度といえるでしょう。

ハンセン病の歴史に学び、誰もの人権が守られる世界を共に築きましょう。

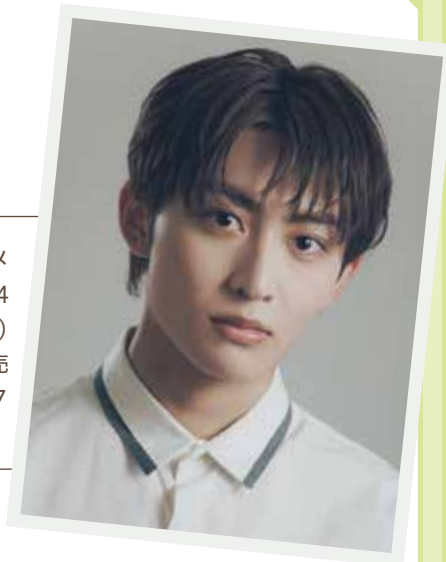
※ハンセン病は、「らい菌」という細菌が主に皮膚と末梢神経を侵す慢性感染症です。以前は「らい病」と呼ばれていましたが、差別の歴史を乗り越え、現在は「ハンセン病」という名称が使われています。

見上げれば

俳優

ひの ゆうすけ
日野 友輔さん

2002年6月3日生まれ。愛知県出身。ワタナベエンターテインメント所属。舞台「ハイスクール・ハイ・ライフ」シリーズ(22~24年)や「ノンレムの窓」(25年)、「仮面ライダーガヴ」(24~25年)などに出演。2025年9月には1st写真集「hiSTORY1」を発売した。2026年には映画「DOPPEL」への出演を控える。令和7年度人権啓発ビデオ「見上げれば」に出演。



Q 「見上げれば」ではどのような人権問題が取り上げられていますか。

A 本作のテーマは「社会におけるひきこもりと人権～誰もが支え合える社会の実現をめざして～」です。ひきこもりと聞くとどうしても何か現実から逃げているように聞こえますが、決して弱さの終着点ではないと思います。心のコップの大きさや形は人それぞれで、だからこそ人に完全に理解してもらうことは難しく、それでも生きていこうと必死にもがく若者の姿が描かれていると思います。

Q 二年間ひきこもり状態で大学を休学中の由良 陽人を演じるにあたって、気をつけたことがあれば教えてください。

A 僕自身2年間大学を休学していたので、学生として取り残されている感覚など自分の持ちうる引き出しを全部開けつつ、俳優としてどこまでも役に寄り添うことで、実際にそういった経験がある人も、そうでない人も、共感と発見をしていただけるように意識しました。

Q 物語中の登場人物に共感するような場面や言葉があれば教えてください。

A 予告でもたくさんの反響を頂いた「なりたくてこうなった訳じゃない」というセリフは、陽人が本音を強くぶつけた、というより溢れ出したシーンだと思っていましたので、悲しさや悔しさやどうしようもないことへの絶望とそれでもまだどうにかしたい、助けて欲しいという願いもこもっているのかなと思うと、僕自身が悩みもがいていた時もあるのでとても共感できました。

Q 今回の作品から考える日野さんにとっての「自分の居場所」とはどのようなところか教えてください。

A 自分が辛い時も楽しい時も、変わらず受け入れてくれる環境が自分の居場所かなと思います。受け入れるというのは単に優しい言葉をかけるとかそう言うことではなくて、黙って見守ったり、無理にでも説得したり、その時の状況に合わせてより良い判断をしてくれる人が周りにいるということが大事なのだと思います。

Q この作品を観た人にどんなことを伝えたいですか。

A もし自分自身を含め身近に、知らず知らずのうちに心の負担が大きくなっていて、いきなり上を向くのが難しいことがあれば、肩の力を抜いてそっと周りを見渡してみてください。

この世界には本当に素敵なことが多いですし、きっとあなたの日常を彩るヒントがたくさんあります。そんな時に会ってよかったと思っていただけるような作品になっていると思いますし、人それぞれに合わせた向き合い方を探すきっかけになれば嬉しいです。



日野友輔さん主演 人権啓発ビデオ「見上げれば」



国際社会と人権

Vol.17

現在、理解がますます求められる「人権」について、国際機構論を専門とする望月先生と考えてみましょう。

今回のテーマ

エイジズムと 高齢者社会

もちづき やすえ
関西学院大学法学部 教授 望月 康恵さん

関西学院大学法学部教授、元人権教育研究室室長。専門は国際法・国際機構論。著書に『新国際人権入門—SDGs時代における展開』（共著）、『移行期正義—国際社会における正義の追及』（単著）など。



エイジズム（年齢による差別や偏見）とは、世界保健機関（WHO）によれば、年齢に基づいて他者や自身に対して抱く固定観念（考え方）、偏見（感じ方）、そして差別（行動）をさします。

エイジズムは社会のあらゆる場面に存在し、私たちの思考や行動にも知らず知らずのうちに影響を及ぼします。とりわけ高齢者に対する年齢による差別や偏見は深刻な問題です。世界の総人口に占める65歳以上の割合（高齢化率）は、1950年には5.1%でしたが、2020年には9.3%に達し、2060年には18.5%に達すると見込まれています（『高齢者社会白書』2025年）。高齢化社会は人類の進歩の証ですが、高齢者に対するエイジズムは見逃ごせない課題です。

高齢者に関するエイジズムとは、「年をとっている」という認識に基づいて生じる思い込みや偏見、差別的な言動や慣習のことです。これは他者に対してだけでなく、自身にも現れることがあります。家族や地域社会の中で高齢者の役割や行動に対するイメージが形成されていきますが、加齢のプロセスは人それぞれであり、身体的・精神的な変化にも個人差があります。それにもかかわらず、高齢者に対する一面的な見方が根強く存在しています。

高齢者に関するエイジズムは、「高齢者は年齢に伴い、

能力が劣る」という前提に基づいていますが、人種差別や性差別と同様に、根拠が必ずしも明確ではありません。しかし、こうした固定観念によって高齢者を見ることで、個人の尊厳が損なわれるおそれがあります。また、高齢者一人ひとりに目を向けることなく、画一的に捉えて「自分たちとは異なる存在である」と他の世代が思い込むことにもつながりかねません。高齢者は「社会から退いた人」「弱い立場の人」と見なされがちであり、さらに「高齢者はこうあるべきだ」という考えが社会に広がることにより、高齢者自身の行動や思考が制限される可能性もあります。

国連人権理事会は、2025年に高齢者の人権に関する条約案を作成する会合の設立を決定しました。高齢者の人権の促進と保護、そして完全な享受の確保を目的とする条約が策定される予定です。高齢化がさらに進む世界において誰もが暮らしやすい社会とは、エイジズムのない社会です。私たち一人ひとりが長く生きられる社会で高齢者の人権を確実に守ることが、ますます重要になるでしょう。

気になる用語をCheck

☑ 高齢化社会

総人口に占める65歳以上の割合（高齢化率）が7%を超えた社会のこと。14%を超えると「高齢社会」、21%を超えると「超高齢化社会」と呼ぶ。

知ってる？

きずなの
ぎゃく

人権啓発映画

“ぼくの名前はラワン”

耳の聞こえない少年が“言葉と居場所”を探し求める成長の物語

あらすじ 生まれつき耳が聞こえないクルド人の少年ラワンの成長に寄り添うドキュメンタリー。生まれ故郷のイラクでろう者に学習の機会はなく、遊び友達は兄だけ。ラワンは「自分は誰よりも劣るのだ」と思っていました。ラワンのため、家族は長く危険な旅を経てイギリスへ亡命します。王立ダービーろう学校へ入学したラワンは手話を教わり、友達も少しずつ増えていきますが、ダービーが「故郷」になりつつあった矢先、国外退去を命じられます。学校や地域の人々の抗議で退去は延期となりますが、役所がラワンの手話の習熟度を査定す

ることになります。

幼いラワンはろう者が聴者と同じように暮らせる「別の惑星」を夢想していました。しかしマジョリティが必要な配慮を怠らなければ、外国にルーツのある人も、障害のある人も切り捨てることのない環境は実現できるのです。

監督／エドワード・ラブレース
脚本／エドワード・ラブレース
出演／ラワン・ハマダミン
2022年製作／イギリス／90分

1月9日（金）から
シネリーブル神戸で公開中



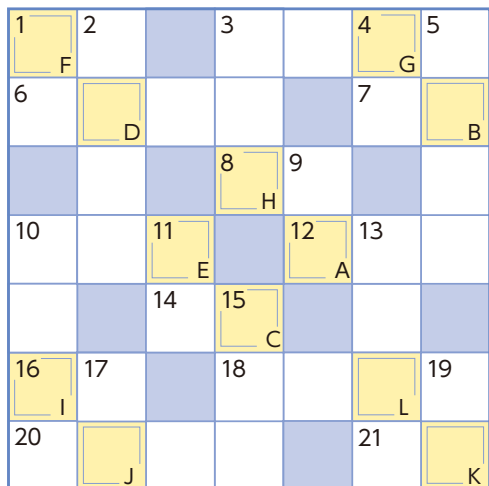
©Lawand Film Limited MMXXII, Pulse Films, ESC Studios, The British Film Institute

ふれあい サロン

とても便利な

投稿&クロスワードで
オリジナル
ダブルポケットフォルダを
プレゼント!

問 アルファベットを順番に並べると、何という言葉になるでしょう?



たてのカギ

- ① 春夏秋冬のこと
- ② この冊子は「____人権ジャーナルきずな」です
- ③ 料理のさしすせその「さ」
- ④ 食____ 性____ 睡眠____
- ⑤ ハンドルを握って車を____します
- ⑨ 料理のさしすせその「そ」
- ⑩ どれも同じである様子。100円____
- ⑪ 2025年の干支はヘビ、では2026年は?
- ⑬ みんなで飲み食いを楽しむ会
- ⑮ 地域の秩序や安全
- ⑰ 千枚漬けなどにもなる葉っぱまでおいしい野菜
- ⑲ 天____ カツ____ 親子____



よこのカギ

- ① 公費ではなく個人で出すお金
- ③ 企業が就職希望者を雇い入れること
- ⑥ 清水寺や金閣寺がある都道府県
- ⑦ 漢字には音読みと____読みがあります
- ⑧ 地球表面の約7割はこれ
- ⑩ !や&や%や@など
- ⑫ 誰かと離れて連絡もあまり取らなくなること
- ⑭ 「市」「区」をさらに分けた行政単位
- ⑮ 同じかそれより小さい
- ⑯ 「森のバター」とも呼ばれる緑色の果物
- ⑰ 饅頭はこしあん派とー派がいます
- ⑲ ハンコのことで

11・12月号の答え **ゴウリテキハイリョ**



読者からのお便り 11・12月号を読んで

細川紹々さんの本を読むと自分にも当てはまることがたくさんあり、なぜかホッとしました。いくつになっても「自分を
知ること」が大切だと改めて思いました。

(加東市 ひと安心さん)

今回もいろいろな人権課題が取り上げられていましたが、
どれも私たちの心に余裕がないと人を傷つけてしまうこと
になってしまうなと思いました。規則正しい生活をして、心
も身体も健康に過ごすことをめざしたいです。

(神戸市 クニちゃんさん)

「読者からのお便り」の投稿掲載者(令和8年3・4月号)とクロスワードの正解者(抽選で10名)とに、「オリジナルダブルポケットフォルダ」をプレゼント。本誌「きずな」へのご意見やご感想、人々とのふれあいを通した心温まるエピソードなどを募集しています。どしどしご投稿、ご応募ください。

※当選者の発表は、賞品の発送をもって代えさせていただきます。

※投稿掲載時はペンネームの使用も可能です。

応募方法

はがき、FAX、Eメール、HPの「きずな投稿」で受け付け。クロスワードの答え、郵便番号・住所、名前(ペンネームを使用の場合も要併記)、電話番号、年齢、職業、本誌へのご意見・ご感想を明記の上、ご応募ください。

締め切り 令和8年2月13日(金)必着

応募先

〒650-0003 神戸市中央区山本通4丁目22番15号 県立のじぎく会館内
(公財)兵庫県人権啓発協会 「きずな」ふれあいサロン係
TEL:078(242)5355/FAX:078(242)5360
Eメール:info@hyogo-jinken.or.jp

*応募者および投稿者の個人情報は管理を適切に行い、誌面づくり以外の目的には利用いたしません。



2/26

ひょうご人権シンポジウム開催のお知らせ

(公財)兵庫県人権啓発協会では、令和5年度「人権に関する県民意識調査」の結果を受け、人権に関するシンポジウムを開催します。タイトルは「若者の人権意識について考えるー令和5年度県民意識調査の結果からー」。

いま、若者たちは人権についてどのように考え、どんな意識を持っているのか一気鋭の研究者を迎え、県民意識調査をはじめ様々な資料からその意識を読み解き、若者たちの関心を呼び起こす啓発について考えます。パネルディスカッションには若者たちも参加予定です。

日時

令和8年 2月26日(木)
14時～16時(13時30分開場)

参加
無料要事前
申込

場所

兵庫県立のじぎく会館 ふれあいルーム
〒650-0003 神戸市中央区山本通4-22-15

パネリスト

岡邑 衛さん(甲南大学准教授)
藤原 靖浩さん(関西福祉科学大学准教授)

助言

塚田 良子さん(兵庫県人権教育研究協議会事務局次長)

お申込方法

ハガキ、FAX、インターネットで受付。
お名前、電話番号、Eメール、配慮事項、「シンポジウム参加希望」
を明記の上、下記までご連絡ください。

[締切]

2月12日(木)必着

[申込先]

〒650-0003 神戸市中央区山本通4-22-15 県立のじぎく会館内
(公財)兵庫県人権啓発協会 啓発・研究部

FAX / 078-242-5360

MAIL / info@hyogo-jinken.or.jp

※当日のようは後日YouTubeにて配信予定です。



こちらからも
お申込できます。



質問・意見の受付

I N F O R M A T I O N

HYOGOヒューマンライツ作品コンテストの入賞者が決定!!

<文芸部門>

*学齢 = 学齢児童生徒(中学生以下)

<動画部門>

賞名	分野	部	作者名(敬称略)	作品名
最優秀賞	創作	一般	高柳 美緒	聞こえる色 感じる音
	随想	一般	桃井 唯月	人権とはなんだろう
	詩	一般	蔭谷 千春	幸せなとき
優秀賞	創作	一般	山口 豊	白ねこ人形劇団
		学齢	瀬尾 寧来	左耳
	随想	一般	大城戸 聡子	家庭内の人権について ～家族の役割～
		学齢	原田 正樹	優しい世界の創り方
	詩	一般	黒田 紀子	シャボン玉のように
		学齢	石本 芽依沙	一人じゃない世界

賞名	応募者名(グループ名)	所属団体	作品名
最優秀賞	チームC	県立伊丹北高等学校	Hurt Hearts
優秀賞	神戸星城高校放送部	神戸星城高等学校	わかってください

<イラスト部門>

賞名	応募者名(グループ名)	所属団体	作品名
最優秀賞	柴田 結衣	明石市立野々池中学校	優しさで明るく
優秀賞	福永 柚樂	クラーク記念国際高等学校三田キャンパス	未来を描く

谷 五郎の
笑って暮らそう

ラジオ関西「谷五郎の笑って暮らそう」は、毎週日曜日10:00～11:35に放送しています。11:25頃からの「ハートフル・フィーリング」のコーナーで「ぎざな」の記事の紹介や寄稿者へのインタビュー等を発信します。



今号の記事に関連した人権クエスチョンを表紙で取り上げています。

今回の表紙は、心和む風景が広がる淡路エリア。島を自転車で1周するサイクリングコース「アワイチ」は、豊かな自然と島ならではのグルメなどを楽しめると人気のアクティビティです。出入国在留管理庁の発表によると、日本に住

む外国人の数は2025年6月末時点でおおよそ396万人*で、過去最高を更新。国籍や性別、年齢、障害の有無などにとらわれず、お互いを認め合う姿勢が暮らしやすいまちを作ることに繋がります。

※出典:出入国在留管理庁「令和7年6月末現在における在留外国人数について」

兵庫県
人権啓発協会HP

X

Instagram



ホームページ、SNSでも
情報発信中。
フォロー、リツイート等
よろしくお願いします。

兵庫県・(公財)兵庫県人権啓発協会

〒650-0003 神戸市中央区山本通4-22-15 県立のじぎく会館内

TEL 078(242)5355 FAX 078(242)5360

info@hyogo-jinken.or.jp

2026(令和8)年1・2月発行